

麦 愁

今 井 俊 昭

妻がカメラにはまった。まさに五十の手習いである。もともとあまり趣味がないほうであったが、凝りだすと一心不乱である。始めたばかりで楽しいのか、なんでも撮りたがる。あちらへこちらへとつきあわされる。桜が咲けば桜、向日葵、秋桜、紅葉と名所を駆け巡る。海へ山へと足を運ぶ。私も妻のお古のカメラを借りてレンズを向けたことがあるが、写真のセンスがないのかちつとも上手く撮れたためしがない。「こんなきれいで広い風景の一部を切り取ってどこが楽しいの」と屁理屈をつけて、私はカメラをやめた。

しかし、妻とのカメラ行のおかげで季節の移ろいや季節を表わす美しい日本語に少し気が向くようになったのは思わぬ収穫である。

今年六月六日が二十四節季の「芒種」であった。「芒種」とは「芒（のぎ）」と呼ばれるイネ科植物の種子に見られるとげのような突起を持つ植物の種を蒔く時頃を表している。曆の上ではそうでも鈴鹿市では台風の影響を避けるためである。か、田植も年々早くなっている。今年はゴールデンウィークの頃にはどの田にももう苗が植わっていた。田植えのあとまだ頼りなげだった苗も六月の芒種の頃には青々とした若稲に成長していた。そんな田んぼの一面に、麦畑が広がっている。そこだけが、まるで秋がやって来たかのように、麦の穂が黄金色に輝いていた。

麦の秋、そう「麦秋」である。

妻にとつては絶好の被写体である。何度も何ヶ所も麦田を求めて車を走らせた。最近生産調整のためか水田を利用しての麦づくりが増えているように、そんなに苦労せずとも麦田を見つけることはできた。妻の撮影の間、私は風景を眺めているこ

とが多い。写真には愛想を尽かしたが、生長の盛りの稲の緑と実りの時期を迎えた麦の金色のコントラストは見事であり、またちよつと不思議な感覚をおぼえた。稲穂が実る本当の秋は、まさに豊穡の秋といった豊かさを感じる。ところが、自然が青葉に輝き、田んぼの稲が若々しく生長しているこの時期に実りを迎える麦には何故か豊かさというより侘しさのようなものを感じてしまう。しかし、そんな感情を抱くのは私だけなのかもしれない。

眼前の麦穂の波の色が失われていき、私は色褪せた思い出の一場面を思い浮かべていた。

私がまだ本当に幼かった頃、近鉄鈴鹿市駅がまだ「神戸（かんべ）駅」の名で終着駅だった時のことだ。駅前に小さなパン屋があった。自家製のパンを焼き、販売している店であった。

その日、父に手をひかれそのパン屋に行った。父は手に白い布袋を持っていた。布袋にはいつぱいの小麦が入っていた。うちは農家ではなかったから、たぶん母方の実家の農家でわけてもらったものだ。その頃はまだ物々交換をやっていたのだらう。その小麦とパンとを交換に来たのだ。父は小麦と引き換えに食パンを二斤もらったように憶えている。そしてパン屋のおじさんが幼い私に声をかけて菓子パンを一つ手渡してくれたことをはっきりと思い出す。その時、その菓子パン一つをうれしいとは思わなかった。むしろ、子ども心に恥ずかしく惨めな気分になったように憶えている。その頃は日本のたくさんの家庭が貧しかった。それにしても何故だろう、その時の父の小麦とパンとの交換の姿が貧しくて侘しい光景として焼きついているのは。終着駅の神戸（かんべ）駅の暗いイメージと重なり、もの哀しいモノクロの思い出である。

その父は昨年の秋、風呂からあがったあとおは

ぎを食べ「おいしいが、大きいので半分は明日食べる」と言っただけであった。少し呆けてきてはいたがまだまだしつかりしていた。突然の、自分が苦しむことも周りを苦しませることもない死であった。穏やかな人柄そのままに穏やかに亡くなったねと葬儀に参列した人々の何人もから同じ言葉を聞いた。

目の前の麦の黄金色が徐々に色を取り戻して我に返った。妻の撮影はまだ終わりそうにない。

麦秋……美しい日本語である。黄金色の麦穂の波に私の前でただ一度だけ侘しく映った父を思い出した。私にとつて麦秋は「麦愁」でもある。